

雇用、利子、お金の一般理論
ジョン・メイナード・ケインズ

人間同士の腹の探り合いで動く経済の仕組みを看破した現代経済学のバイブル。死んだと言われながら世界金融危機で完全復活した底力とともに、小ネタが持つ深い意義と洞察もいまやと理解されつつある。



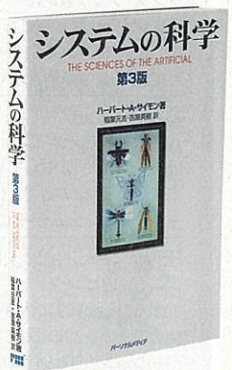
利己的な遺伝子
リチャード・ドーキンズ

現代教養の基礎で、生物の発展だけでなく文化、経済、社会すべてを支配する原理たる進化の名解説書。なぜ人間が利己的でないかを解説しているのに、題名だけ見て誤解している人が多く、バカ判定機としても有用。



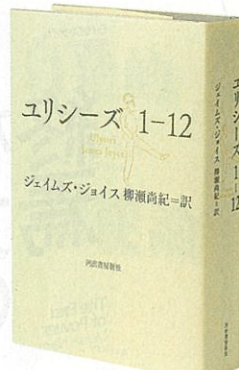
疫病と世界史
ウィリアム・H・マクニール

人間の生存と発展が疫病との闘いと共存戦略の成果だったことを指摘。医学の発展で終わったかと思われていたその闘いの復活を、いま世界が目当たりしている。コロナ禍は我々を捕らえる生物/人類史の証拠でもある。



システムの科学
ハーバート・A・サイモン

人間のつくりあげる様々なもの——社会でも機械でも経済でも企業でも——をどう理解するか？それを俯瞰的に眺めた異様な本。抽象度は高いが、軽薄な「革命」「パラダイムシフト」にだまされない強い知的理解のために。



ユリシイズ
ジェームズ・ジョイス(河出書房の柳瀬尚紀訳)

現代小説のすべてを詰め込んだ怪作。平凡な一日が神話的世界の永遠とつながる。名文とは無縁の、言語自体に耽溺した表現の異様さは、柳瀬訳で是非。内容と表現の双方で進化の果てに言語と観念にとらわれた人間の限界と可能性を示す。

劇場都市
大室幹雄

古代中国都市を題材に、原型的な思想の呪縛とそれが形成する都市、社会、文化の形を描き出す名シリーズ。

言語を生みだす本能
ステューブ・ピンカー

生物学的基盤から、なぜ人間だけ言語が？生まれつきの脳モジュールの存在を納得させ、文化の有り様まで広がる名著。

磁力と重力の発見
山本義隆

万有引力発見に到る思想の流れから、魔術も含めた人間の叡智の発展を描き出す。続刊では科学発見の社会基盤にまで触れる。

身ぶりと言葉
アンドレ・ルロワ＝グーラン

生物発生から進化、言語の発生、現代文明まで壮大な射程を持つ人間全史。その果てに見る、人間の自由の持続性懐疑論は深い。

仕事!
スタツ・ターケル

あらゆる職業人に徹底的インタビュー。各人が抱える誇り、幻滅、悩み、自負、絶望——その集積としての社会と時代の重みが響く。

我々を動かす力とは何なのか？そしてそうした各種水準はどんなふうに関係しているのか？それに答えられる総合性を持つ本は、どうしても長く複雑になる一方で、読みかじりや流し読みでも示唆を与えてくれる(ことも多い)。そんな、ちよつと面倒ながらも様々な分野を包含する、視野の広い本をここでは選んでいる。本当は物理学っぽい本も入れて物質レベルから大風呂敷を広げたいところだけれど、生物誕生以降ですてに手一杯。生物の進化、人類発展、言語形成、都市や社会・文化の発達に経済、泥臭い仕事の総体とそれが持つ神話的な永遠性——そのそれぞれの段階で、人は様々な力に支配されている。それは一方で人を制約するのだけれど、一方ではそれをまさに人が進歩発展を遂げるために利用する力でもある。限界こそが発展の道で、不自由こそが自由を生み出す——これらの本はどれも、この本質的な矛盾も敏感に察知しつつ、人類の未来への可能性を伝えてくれるものばかり。ご自分の興味のままに読みつつ、それぞれの本の広がりに従って他の分野にもどんどん越境し、分野をまたがる原理の強さやその相互のからみあいをもとに、世界をどんどん広げていったらだければ幸甚！



鹿島 茂 Shigeru Kashima

フランス文学者。1949年、神奈川県生まれ。東京大学文学部卒。同大学院博士課程満期退学。書齋スタジオ「NOEMA images STUDIO」開設。著書に『本当は偉大だった 嫌われ者リーダー論』ほか多数。



山口 周 Shu Yamaguchi

独立研究者・著述家・パブリックスピーカー。1970年、東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒。同大学院文学研究科修了。電通、ポストン・コンサルティング・グループなどを経て現職。著書に『ニュータイプの時代』ほか多数。



山形浩生 Hiroo Yamagata

翻訳家・評論家。1964年、東京都生まれ。東京大学大学院工学系研究科都市工学科およびマサチューセッツ工科大学大学院修士課程修了。著書に『断言 読むべき本・ダメな本 新教養主義書評集成』ほか多数。

本棚に並んで
いるだけでも
勇気をももらえた

不安が消える、自信につながる 名著・古典 入門30冊

生きるとは何か、人間社会とは、世界とは何か——。いまだからこそ社会や世界を冷静に見つめ、真の教養を探求したい。3人の「読み巧者」が、読んで勇気が出る名著・古典30冊を一挙紹介！

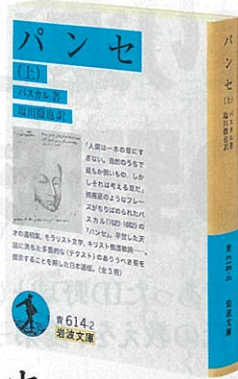
自分は何者か？
結局のところ教養としての読書はこの疑問に何らかの形で示唆を与える(と期待される)ものだ。物質、生物、社会、経済、文化など様々な水準で、我々が置かれているのはどこなのか？





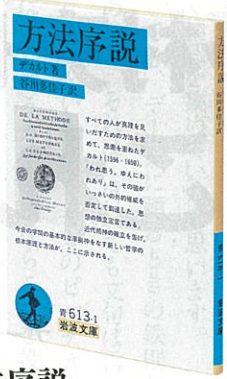
箴言集
フランソワ・ド・ラ・ロシュフコー

人間の最も根源的な欲動は「褒めてくれ!」という自己愛にほかならない。それは、性欲よりも食欲よりも強く、時には無私無欲を装うこともある。私の「ドーダ理論(ドーダ、すごいだろう!)」の基礎となった箴言集。



パンセ
ブレイズ・パスカル

人間はどんな仕事にも向いている。向いていないのは、なんの気晴らしもなく部屋にじっと閉じこもっていることだけだ——新型コロナウイルス感染拡大により、人類全体が蛭居を強制されているいまこそ読むべき本。



方法序説
ルネ・デカルト

世の中はなぜうまくいっていないのか? それは、人が考えるための能力(理性)を与えられながら「正しく考える方法」を教えられていないからだ。こう考えたデカルトが書き上げた「正しく考えるための方法」のイントロダクション。



論理学 考える技術の初歩
エティエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック

デカルトの『方法序説』に異を唱えるコンディヤックによる独自の『方法序説』。意識的にできることは無意識的にできていることにほかならないから、無意識的にできていることを分析して意識化する以外にはないというのがその主張。



自発的隷従論
エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ

若くして逝ったモンテニユの親友の遺作。人はなぜ暴君に自発的に隷従するのかという根源的問いを発し、それは人間が長いあいだに隷従する習慣を身につけ、隷従を自然状態だと感じるようになったからだとする。これまた、いま読まれるべき本。

寓話
ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ
「すべての道はローマに通ずる」など格言のもと、イソップ寓話をもとにフランス的な毒とエスプリを盛り込んだ寓話集。

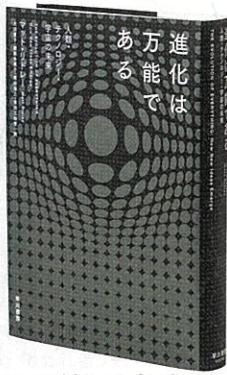
アメリカのデモクラシー
アレクシ・ド・トクヴィル
利己心の塊アメリカ人社会がなぜ自己崩壊せずに機能するのか、謎を解き明かす名著。正しく考えられた自己利益の追求が原理だ。

贈与論
マルセル・モース
物々交換ではなく、一方的に先に与える「贈与」こそが交換様式の始まりであるとした伝説的な人類学の古典。

比較史の方法
マルク・ブロック
歴史を科学に近づけるには条件のよく似た2つの歴史を比較する「実験の史学」しかないとするアナール史学の創始者の講演。

ロラン・バルト モード論集
ロラン・バルト
モードは思想であり、思想であればその言語は解読可能だとするバルトの「モードの体系」のアンソロジー。シャネル論が秀逸。

私はフランス文学者を肩書にしているので、最もフランス的特徴のよく出た本を選んでみた。フランスの特徴とは何か? フランス思想やフランス文学・芸術を貫く特徴を一言で要約すれば、「普遍的たらんとする意思」ということになるだろう。人類は、人種、民族、言語、体制など様々なかたちに分かれているが、それらの個性は思想や文学が究極の目的とすべきことではないと、フランス人は考えるのだ。むしろ、ホモ・サピエンスとしての人類に普遍的なものは何かと追究することこそが思想、文学、芸術の本質なのだ。フランスの特徴を最もクリアに表したのが、ルイ14世の時代のモラリストと呼ばれる文学者たちだ。デカルト、パスカル、ラ・ロシュフコー、ラ・フォンテーヌらは、フランス人についてではなく、あくまで人間一般について考えを巡らそうとした。その結果、どれほど時間と空間を隔ていようと、いかなるときにどんな場所で読んでも、「これは私のことだ」と深く納得できる思想書や文学書、芸術作品が出来上がったのである。現在、コロナ危機によって世界が分断され、多くの人々が個性にしか生きられないと感じている。この10冊は、こうした瞬間にこそ読むべき普遍性志向の本である。



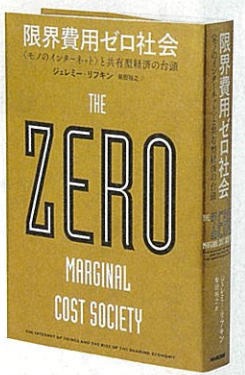
進化は万能である
マット・リドレー

「進化」という概念は生物のみならず、企業、文化、宗教など、様々な分野に適用できる。オールドタイプは「正解」を求めたがるが、必ずしも「正解」が生き残るわけではない。ロジックは逆で「生き残ったもの」が「正しい」のだ。



反脆弱性
ナシーム・ニコラス・タレブ

「反脆弱性」とは「ストレスや外乱によりますます強くなる」ということ。オールドタイプは「ストレスや外乱」を嫌がるが、むしろ不確実性が高まっているという時代だからこそ「不確実性を武器にする」思想が必要。



限界費用ゼロ社会
ジェレミー・リフキン

ニュータイプは失敗を忌避しない。なぜなら、現代は失敗のコストが限りなくゼロに近づいているため、「リスクを冒さないこと」の機会費用のほうが高コストになっているからだ。戦略論の大転換。



怠惰への讃歌
バートランド・ラッセル

「仕事はよいものだ」という信念が多くの害を引き起こしている。本書冒頭のラッセルの言葉だ。20世紀を代表する哲学者・数学者が生涯の最後にメッセージとして残そうとしたのは「みんな働きすぎ」ということ。改めて耳を傾けたい。



権力の終焉
モイセス・ナイム

CEOの在任期間は短くなり、企業の栄枯盛衰のライフサイクルは加速化する。今日の社会ではあらゆる領域で「パワー=権力」が脆弱化している、と本書は指摘する。権力はもつと隠然たるものに変容せざるをえない。

ライフ・シフト
リンダ・グラットン他
50歳が折り返し点となる「人生100年」の時代に「60まで働いて余生を送る」という生き方はどう容れざるをえないのか。

隷属なき道
ルトガー・ブレグマン
歴史上、最も繁栄している時代になぜ我々はいかにも不幸なのか? 一日3時間の労働とベーシックインカムがその解だと著者は説く。

モチベーション3.0
ダニエル・ピンク
物質的・経済的に大きな不満がない時代に、何が競争優位の源泉になるか。それは「モチベーションだ」というのが著者の主張。

ラディカル・マーケット
エリック・A・ボズナー他
資本主義と共産主義という、一般には両立しないと考えられているシステムのいいとこ取りを提案。その手があったか!

プラットフォームの経済学
アンドリュウ・マカフィー他
人工知能の価格性能比がこれ以上上がると何が起きるか? 煽りに右往左往する前に本質をつかもうというのが本書の態度。

今回の選書のテーマは「ニュータイプの武器」。昭和の後期に驚くほどうまく機能していた社会のシステムやプロセスが、いろいろなところで機能不全に陥っている。これまで称賛されてきた「正解を出せる」「懸命に頑張る」「失敗を避ける」といった「昭和の優秀人材」オールドタイプの「価値」が大きく減損している一方で、「新しい行動様式・思考様式」はなかなか見えてこない。社会の様相が変われば価値の定義も変わり、価値の定義が変われば優秀さの定義も変わる。「今後、どのような行動様式・思考様式が求められるのか」という問いに答えるには、「社会が本質的にどのような方向に変化しているのか」を深く考えなければならぬ。ピクチャーアップした10冊はどれも、世界を代表する知性によって示された「いま起きている変化」についての考察である。率直に言って、知的に相当なタフネスを要求するツワモノどもではあるが、だからこそ、著者と知的格闘をするように、賛成するべき点については賛成し、納得できないところは「なぜしつくりこいのか」を考察しつづ読むことで、表面的に見える世界の変化の裏側で進む大きな地殻変動について洞察力を得ることができるとは思わない。